

# DRAMA かながわ 79

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472



## 神奈川県演劇連盟合同公演『主役は江美里Oh!』

【原案】ウィリアム・シェイクスピア『オセロ』より

【脚本】福本ぷう之介(プラスチックな月) 【演出】仲尾玲二(G/9-Project)

2020年2月21日～22日 神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール

文：2019年度合同公演プロデューサー 佐藤典久(仲尾玲二)

## 合同公演という名の祭り

「衝突・対立・争い」。多くの劇団が集まり力を合わせて一つのモノ(作品)を作る時、どうしても避けられないキーワードである。「やり方、考え方は十人十色」「自分の常識は他人には非常識」「共通言語だと思っていた言葉はニュアンスの違いですれ違う」。それぞれ

の団体が各々の信念を持ち活動しているのである。当然の事であろう。しかしぶつかり合いで生じた熱を、「理解・和解・譲り合い」と引き換えた時、そこには計り知れない喜びと言ひ知れぬ高揚感が生まれる。2019年度の合同公演は正にそれを体感する事が出来た素晴らしい公演だったと思います。

本年度の座組は神奈川県演劇連盟(TAK)から

7団体（劇団よこはま壺座さんは昨年末で惜しまれながら解散）と非加盟劇団や個人、そして一般公募で集まってくれた12名の方達の合わせて37名の出演者、さらにスタッフとして参加して頂いた方々や色々な方面から私たちを支えてくれた本当に大勢の方達とで構成されました。この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

2019年5月頃、脚本を担当してくれた福本氏（プラスチックな月）と数回のミーティングを行い、本作「主役は江美里Oh!」の骨子を作りました。それから三回の大規模な改変をお願いしてようやく完成した脚本は本当に素晴らしく、読むだけで心躍るような作品になりました。普段落語を元に公演を手掛ける福本氏とシェイクスピア作品との異色コラボとなった本作はとても親しみやすく、文字通り老若男女に愛されておりました。



11月、集まって来てくれた役者やスタッフの皆さんは、互いに初めましての方が多かったにもかかわらず、まるでずっと同じ釜の飯を食ってきた仲間のように仲が良く、常に賑やかで笑いの絶えない現場でした。専用借りた稽古場は必要十分な広さを備えているとは言えず、常にキューキュー状態で稽古をする事になりましたが、誰一人文句を言わず、座席の代わりに使った木箱を譲り合いながら、ジッと稽古に集中し



ていました。稽古は週三回のペースで開催しましたが、空いている日にも稽古場を開けて欲しいというリクエストがありました。有志で自主稽古をする程の熱心さはみんなに伝播してゆき、本番へ向かう様はまるで祭りのようにぎやかさでした。また、六回の稽古を経て本番の舞台に立つ、というコンセプトの元募集をし、応募してくれた12名のサポートキャストさん達は、好奇心旺盛に稽古を楽しみ、本番の舞台上を縦横無尽に駆け回り、作品に勢いを与えてくれました。

そして年が明け2月、世には新型ウイルス流行の噂が出回り、人々が自主的に外出を控えるようになり始めた頃、公演の幕が上がりました。狭い稽古場から大きな舞台に解き放たれた役者達は伸び伸びと力強く、生き生きとした表情で二時間弱の作品を演じきりました。アンケートによる評判も良く、我々の熱が客席へ無事届けられた事は、終演後にロビーでお見送りをしたお客様の顔を見て確信できました。

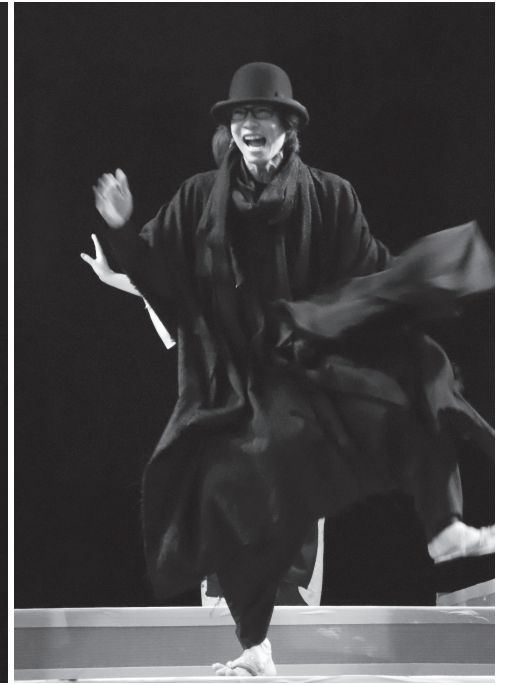
公演が終わり、二週間程度が過ぎ執筆している現在でも、関係者間の交流は続いており、ワークショップへの行き来や劇団どうしで客演し合ったりなど、とても活発に活動されています。これこそが合同公演の効能であり、これこそが更なる演劇熱の爆発に繋がってゆく事を切に願います。





# 合同公演『主役は江美里Oh!』

文：劇団820製作所 波田野淳紘



嫉妬は「緑色の目をした怪物」。人の手には負えない荒ぶるもの。『オセロ』の台詞には妊娠のイメージを匂わせるものが多いが、確かに嫉妬は「わたし」から生まれ育つ「わたし」の異物であり、時に「わたし」を食い破る。どのような高潔な人物も、それと遭遇すれば血（現実であれ、象徴であれ）が流れる。

この度の上演では『オセロ』が幸せな結末を持つ劇として再構成されている。『主役は江美里Oh!』という通り、イアーゴの妻であるエミリアに大きな役割が与えられ、夫を愛する彼女の心の清らかさが、定められた悲劇を塗り替えていくという筋立てだ。

原作ではヴェニス公国の軍人であるオセロは、町火消し「を組」の頭・尾瀬朗と改められ、全体が江戸の町を守る火消し仲間とその友人、家族らの群像劇として描きだされる。オセロを陥れるイアーゴはシェイクスピアの筆では救いようのない悪だったが、今作の伊安吾は「を組」の頼れる兄貴分であり、尾瀬朗を心から慕っている。弟分である勝司が次期頭に指名されても、落胆を飲みこみ、一人で耐え忍ぼうとするほど成熟した人間だ。それがなぜ、周囲を破滅に導く行動を取るのか。

作家の福本ふう之介は、嫉妬を発動させる仕掛けとして一人の死者を登場させた。賭け事で大金を手にし

ながらも死亡した長五郎である。彼が死してなお悪企みをし、生者たちを操り、心の弱さにつけいり、人々のひた隠しにしている悪や攻撃性を露わにする。

退治すべき「怪物」は人々の内から外へと居場所を移し、それゆえに勧善懲悪の物語として大団円を迎えることになった。まさしく悪魔払いの構造だ。呪術師が人の内なる苦しみを「悪霊」と名指してそれを払うように、悪意は死者によって増幅されたものとされ、人が人を思う心の連鎖によって浄化された。

悲劇は滅びる一瞬前の人間がどのような言動を取り得るかを描く。喜劇は生きるための人間の死にもの狂いの逃走、跳躍を描く。そこに軽重はない。作家、演出家両氏の人間に対する信頼と、したたかさがこの度の形式を採用させたと思わせる。

共通言語の持ち合わせのない合同公演につきまとう課題だろうか、幕開きの火消しの群舞において、目の前で街が燃えていることの緊張感が集団としての彼らの身体に感じ取ることができなかった。発語や空間への意識も、演じ手個々の作業に任されているように見受けられた。

尾瀬朗を演じた佐々木政晴、伊安吾を演じたオusstたかのりの男ぶりが印象に残る。江麗尼を演じたおらんだの怪演も、舞台上に風を呼ぶものだった。(敬称略)

# 劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

## 劇団砂からマカロン

主に横浜市で活動している劇団です。メンバーはほぼ20代！若さを生かしてフレッシュな舞台をお届けします。

脚本を主にヤシャタツ（夜叉達彦、夜叉達久）が担当。ストリートプレイだけでなく、朗読劇やコントまで様々な舞台を企画しています。少しでもご興味がおありでしたら、ぜひ一度だけでも劇場に足をお運びくださいませ。



## 劇団おらんだ



明治大学演劇サークル活劇工房出身の演劇集団。といっても現在一人。10年の活動休止期間を経て2018年より活動再開。何気に古い劇団。

作風はいわゆる「メタ芝居」によるコメディ。主宰の「おらんだ」は活動停止期間中も各方面で演劇活動を行う。現在は無所属。最近芝居仲間が結構有名になってきて悔しがっている。みとれよ。仲間を常に募集しております。

## theater 045 syndicate

主宰・中山朋文と俳優・今井勝法による演劇ユニット。2011年、主宰の中山が地元である神奈川からの発信のため設立。劇場公演の他、拠点である横浜ベイサイドスタジオでの実験的なアトリエ公演、中華街でのライブ・ダンスとのコラボレーションイベントなども行う。地元・横浜を題材にした作品も多く作っている。

また、短編公演「劇王」を通じて、日本各地の演劇人との交流も深い。ハードボイルドでありながら軽快さと可笑しみをたたえた作風が特徴である。



個人会員として下記メンバーが加盟しました。(敬称略・順不同)

鈴木邦男、川西玉枝、濱田重行、河住靖一



# 僕らの演劇

## 劇団こゆるぎ座

「小田原藩帰参録 いざ還りなん」作:後藤翔如、演出:楠田正宏  
2019年10月19日~20日 於:小田原市民会館大ホール

**今** 公演は第67回公演と銘打たれている…劇団こゆるぎ座は戦後間もない昭和21年に小田原で産声を上げた県内で最も古い老舗の劇団です。いざ会場に入りなん!という気分で入場。空席はちらほら見られるがほぼ満席である、地域に根ざして活動してきた結果なのでしょう。



初代小田原藩主大久保家は改易により小田原を離れ諸国を転々としたが、6代大久保忠朝公の時に75年ぶりに小田原帰参を果たしたという史実を元にした物語なのですが、75年ぶりの帰参がなぜ実現したかについては史実として記されていないそうである。その間に何があったかを創作した物語です。随所に笑いも散りばめられていて楽しい、時代背景や設定も頭にすいすい入ってくる、とても親切に作られている。2幕10景(約120分)の構成。諸先輩方の演技が素晴らしい、市民劇団として昭和から平成そして令和と時代は変われども公演を続けてきたからこそその熱を感じました。主役である森脇又左衛門の最後の口上では場内から拍手が起きていた、役者として感動と嫉妬という感情が込み上げてきたがとても心地よい光景でした。

あっという間の120分、戦後すぐ小田原に文化の花を咲かせ続けてきた老舗劇団の公演は老若男女問わずたくさんの人に見てもらいたい、また見に来たいと思う公演でした。帰り道、小田原名物を観光しながらこれも小田原文化ですよ?と拡大解釈をしながら小田原土産を片手に、小田原藩の歴史と大久保家75年ぶりの帰参についてスマホで調べながら帰路に就いたのでした。

プラスチックな月 福本ぶう之介

## 劇団蒼い群

「あの深い海の底より」作:田中政雄、演出:別府寛隆  
2019年11月2日~3日 於:横須賀市立青少年会館ホール

**舞** 台は戦後数十年の横須賀。釣具屋を営む原田家は祖母(はつ)と息子夫婦(明彦・峰子)、孫(浩)の4人暮らし。祖父(幹二)は若い頃に戦死した。ある日、はつと幹二の幼なじみ、啓吉の訪問があり2人は幹二の思い出話に花を咲かせる。そこに響く轟音…昔フィリピン沖に沈没したはずの戦艦疾風が一家の前に現れる。その甲

板には艦長と幹二の姿。死んでなお家族に会いに来たという幹二は、家族・啓吉と語り合う。そして今を生きる人たちの想いに触れた幹二は安心して自分達の死場所、フィリピン沖の海底へと帰っていくのであった。



話はまず一家と啓吉を交えた6人の会話から展開される。はつと啓吉は幹二との思い出を熱心に語るが、明彦・峰子・浩は軽く聞き流すようで温度差が感じられる。これは終盤まで続くが、死んだ幹二の帰還、はつ・啓吉が幹二に語りかけるうちに6人の中の温度差が無くなっていくのがわかる。明彦・峰子・浩も徐々に感情が昂り、気付けばはつと啓吉と同じテンションになっている。ここに、ベテラン揃いである劇団蒼い群の丁寧な演技とチームワークが光っていた。クライマックスでは日本の敗北を信じられない幹二に対して一人一人が語りかける。再び出会えた喜びを示す啓吉とはつ、幹二の戸惑いを感じて安心させようとする明彦・峰子・浩、それぞれの想いがシンクロし、ようやく幹二が納得するシーンにはグッとくるものがあった。エピソードでは浩が幹二の遺影を拝む。一家それぞれの気持ちの変化が感じられて胸が温くなるシーンである。ホームコメディのようなタッチで描かれた当作品は、戦争という難しく重いテーマであるにも関わらず、観た後も気持ちが明るくなる作品だ。

戦争の機運が高まっているとも言われる現代、かつての戦争の悲劇を後世に伝えていく事が重要だ。今回のようなお芝居は今後の社会において絶対に必要になってくる作品だと感じた。

G/9-Project 横山銀芽

## 演劇プロデュース『螺旋階段』

「小田原みなとものがたり」作/演出:緑慎一郎

2019年11月8日~10日 於:小田原市生涯学習センターけやき

**地** 元小田原の漁港を舞台に、不器用でぶっきらぼうな漁師「赤城智則」と彼を取り巻く、心優しい仲間たちが織り成す「家族」の物語。男手ひとつで娘を育ててきた赤城は漁協の事務所に仮住まいしながら気の合う仲間と笑い溢れる日々を過ごしている。ある夏の日、嵐の訪れと共に8年前離婚した妻が婚約者と一緒にひょっこりやってくる。自分を捨てて出ていった母との再会に戸惑う娘。8年の時を経てバラバラになった家族がそれぞれの新しい道へと踏み出す。

螺旋階段の芝居は昔から何度も観ているが、良くも悪くも緑くんワールドを貫いている。良い意味ではリズムカルで圧倒的なテンポ感とコントのような台詞の小気味良い応酬は誰でも気軽に楽しめる。長い付き合いなので正直に、あえて言葉



はよくないが悪い意味での感想も書き添えると、その「良い部分」の面白さが際立ちすぎて肝心なストーリーが薄く感じてしまうのだ。役者全員が同じようにテンポやノリがいいお陰で、キャラがみんな同じよう個性が際立たない。常に全員全力疾走の怒涛の会話劇に必死で耳を傾けないとセリフの意味を逃してしまう。会場を後にするお客さんはみんな興奮気味に「面白かった」と言っていた。面白かったのは間違いない。でもただ「面白い」だけでは勿体ない気がする。私は螺旋階段の芝居が好きだ。だからこそコント的な面白さという力業ではなく喜怒哀楽、起承転結のストーリー重視の中に軽妙な面白さが味を添える芝居が観てみたい。好みの問題もあるが、長いコント部分を削ぎ落とすことで、さらに引き立つのではないだろうか。面白すぎるというのも難しいものである…。音響も照明も役者一人一人の技量も高く演出も非常に面白く、特に海に落ちるシーンは本当に落ちたようなリアルさに拍手しそうになった(笑) サブタイトル「アジがおいしい編」の続編への期待も高まる。次回はよくある話ではない意外な展開や深いストーリーを観てみたい。

劇団こゆるぎ座 保乃しんり

## Y.S.ベアフットシアター

「巴鼻庵物狂い(ハビアン物狂い)」作:田中千禾夫/演出:フランク三浦  
2019年11月16日~17日 於:横須賀市立青少年会館ホール

11月16日(土)14時開演の公演を観劇させて頂きました。田中千禾夫さんの作品については、高校時代に「おふくろ」、社会人になってからは「マリアの首」に出演しました。青春時代の思い出のある作品のふたつです。演出の三浦さんとも同年輩であり、新劇・アングラ演劇が私の心もかきむしっていました。

さて、今回の作品は観ていて非常に難解でした。江戸後期の話を背景とした作品理解への出演者の努力は大変だったと思います。ただ、作品の中心にせまるエネルギーを今



ひとつ観客としては感じられませんでした。しかし上演作品の中でハビアンが私に残してくれたシーンのセリフは、「心はみな無に等しい…、日本国の中に流れている」、「負け犬のハビアンは君たちや俺自身の中

にいる」でした、理屈はともかく、いつまでも心に残ることでしょう。

最後に、プログラムの中で演出が言っているように「もうすぐ、クリスマスとお正月です。日本人の宗教観を顧みてもいい季節です」と。私もそうなって欲しいと思います。

劇団蒼い群 村田次郎

## 劇団かに座

「お勝手の姫」作:小川未玲/演出:馬場秀彦

2019年11月22日~24日 於:新横浜スペース・オルタ

以前に、かに座さんを観劇したのは「もやしの唄」でした。今回劇評の担当になった作品も同じ小川未玲さん作で、縁を感じます。



舞台には「古びた老舗のレストラン」とあるように丸テーブルが前後に二つ、真っ白なテーブルクロスがかかりナイフ・フォークなどのシルバー等のセッティングがなされ、しっかりとそのレストランの一角がありました。

冒頭はお見合いをしている男女の掛け合いが続く。相手の男がどんな人でも結婚すると決めてきた女と、結婚したくない男。そこへ「姫」と「ジョルジュ」と呼び合う老男女がやってくる。口うるさい叔母さんやら謎の板前さんまでやってきてレストランは大混乱。ギャルソンが運ぶお料理が進むにつれて様々なことがわかってくる。仕事ばかりの夫との暮らしに寂しさや虚しさから心が病み精神的に壊れてしまった妻。妻は自分をお姫様だと思い、夫を自分の執事と思いこんで生活している。大学教授の夫はそんな風にしてしまったことを悔い、妻の望むまま「ジョルジュ(執事)」を演じている。この二人がプロポーズした場所がこのレストランだったこと。このお店が本当は閉店してしまっていること。お店のオーナーのギャルソンが渡す記念のオルゴールは「姫」からお見合いの女性に。セットが素敵だけに消え物が本物でないことの違和感がありました。シルバーを使って食べるふりをするなら、なおさら感じました。アンパンくらいエアで食べなくても良いのにとおもいましたがお料理がエアなのにアンパンが本物なのもおかしいってことだったのでしょうか。

会話劇だと思うのですが、何かと正面を向いて台詞を言うことが多くもっと役者同士の会話が多いほうが良かったと私は思いました。せめて「姫」のジョルジュに希望を訴えかけるシーンは目を見て訴えてほしいと思いました。

ラストシーン、20年前にあのレストランでもらったオルゴール。壊れてしまったオルゴールと壊れてしまった姫(妻)。ジョルジュが最後、本名の「トシエ」と叫びのような呼びかけに振り返る「妻」の顔とオルゴールの優しい音色に涙を誘われました。

演劇プロデュース『螺旋階段』田代真佐美



## 京浜協同劇団

「結婚の申込」 作:A・チャーホフ/脚色:伊賀山昌三/演出:藤井康雄

「死神」 作:三遊亭円朝/演出:護柔一

2019年11月22日~24日、11月29日~12月1日 於:スペース京浜

まずは劇団創立60周年おめでとうございます。一つの劇団が解散せずに長く活動し、また今公演は93回公演であることに深く敬意を表し、これからも末永く活動して頂きたいと思えます。



さて、JR川崎よりバスで15分、バス停を降りて静かな住宅街を少し歩くと、その公演場所の鉄筋4階建てのスペース京浜が目の前に現れた。劇団事務所と稽古場だという。稽古場に客席の雛段を組み、灯体も多数しっかり吊っている…立派な100名程度の小劇場だ。建て込みもさすが老舗劇団、狭い空間に舞台、大道具や役者の出ハケ等、若い劇団は勉強になるだろう。

本編の1部と2部は60分の上演時間で1部はチャーホフの喜劇を日本の舞台にして、セリフを秋田弁に置き換えていた。センター奥の出ハケが効果的で、藤井康雄さんの往年の演技が心地よかった。会話劇でしたので、もう少しテンポとメリハリが欲しいところだ。2部が古典落語の代表作を題材にした「死神」で、読者の皆様もよくご存じ死神に金儲けを教えてもらう話です。この落語ベースの演劇はTAKの劇団「プラスチックな月」の十八番です。古典落語の有名作品ですので、話が面白く飽きがこないでテンポよく展開します。これは演劇のテンポならどうなるかと妄想していました。最後にたくさんのロウソク(LED)を出した演出は見事でした。しかし、落語ベースですので、もう少し遊んだ演出があってもいいかなと思いました。受付の雰囲気は芝居小屋や地元にお祭りのようでいい雰囲気を醸し出していました。最後に越前屋の倅を演じた阿部佳久さんは抑えた演技で印象に残りました。

Y. S. ベアフットシアター フランク三浦

## 劇団河童座

「The Miracle ~ヘレンケラー『我が生涯』より~

作/演出:横田和弘

2019年12月7日~8日 於:横須賀市立青少年会館ホール

重苦でありながら世界各地を歴訪し障害者の教育・福祉の発展に尽くしたヘレン (Helen Adams Keller)。家庭教師としてヘレンを幼少期から支え続けたアニー (Johanna Mansfield Sullivan)。物語は二人を中心に進んでいく。途中「暴れる」と「駭ける」の動作音のみで繰り広げられたヘレンとアニーの格闘シーンでは、(体感的に)7分以上もセリフが無い状態であったにも関わらずじつに見ごたえがありました。

生きることに希望を感じることでできなかったヘレン。しかしアニーから「言葉」という光を教わることにより物語は大きく展開していきます。ラドクリフ・カレッジ (現:ハーバード大学) を首席で卒業したヘレンがアニーとヘレンの母:ケイトと共に壇上で演説するシーンでは演者それぞれの想いもこめられ、私を含め多くの客席の涙を誘いました。180分という少し長めの演目だったことを感じさせないほど、とても素晴らしい作品でした。

ステージの上と下 (ステージ下では更に上手・下手) で場面を切り分けることによって舞台に立体感が出ており、中央に置かれたポンプは押すと本物の水が出るという所謂「本水」を使用していることにもこだわりを感じました。実際アニーがヘレンの顔に向かって水を飛ばすシーンはリアリティを出す上でも非常に有効な演出であったと思います。

ヘレン (子供) を演じた田中優里さん、表現力の高さに惹かれました。終演後になぜかフリフリのエプロン姿 (メイド衣装?) でお見送りしていたのもギャップ感があって良かったです。

あと、メアリー役の飯塚妃菜さん。ツンデレ風な口調や表情にエヴァのアスカを感じました。将来が楽しみな役者さんです。

劇団かに座 オッサたかのり



## 神奈川県立青少年センター・演劇資料室をご利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ、演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸し出しもしています。ご利用は1回3冊まで、2週間借りられます。また、神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もごございますので大いに活用ください。皆様のお越しをお待ちしております。

(開室は火曜日から日曜日。午前9時から午後10時です。)

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 電話:045-286-4485

※コロナウイルスの影響で開室時間等に変更が生じております。ホームページをご確認の上、お越しください。http://kenenren.org/

令和2年1月2日 資料室室長 荒井さんが永眠なされた。恒例の正月の仏像行脚。大好きな奈良。旅に出たまま帰らぬ人となってしまった。死因は心不全。一人で出かけた旅先、ホテルのベッドで係りの人に発見された時には、既に息を引き取っていたと言う。

資料室に入った、左側のいちばん隅のテーブルが、荒井さんの指定席だった。その席で、いつも黙々と戯曲・演劇書・資料に目を通していた姿が忘れられない。人懐っこい笑顔で、来室する高校生や若者だけでなく我々演劇経験者に対してまでも、質問や相談に乗ってくれていた。

荒井さんの資料室での存在は神がかっていた。こんな本ありますかと問いかけると、8000冊もある書庫に迷うことなく一直線で向かい、本を差し出してくれる。いつか、「この本はみんな読んだんですか？」と聞いたら、「まさか…」と言っていたが、私はきくと読んでいたにチガイナイと思っている。それだけでなく、あれほど見事に対処できるわけではない。

荒井さんはちょっと変わった演劇人だ。舞台の上や裏方としての荒井さんの姿はほとんど見たことがない。でも観客席には、必ずどこかの席に座って目を凝らしている。荒井さんは演劇の研究者、学者の印象が強いが、客席側からの守護神のような存在でもあったのかもしれない。

荒井さんは鋭い評論眼をお持ちになっていたに違いないが、いつもやんわりした感想を述べ、決して相手を傷つけないコメントを意識していたように思える。最高の誉め言葉は、「良い芝居を有難う！」だったのだと思っている。

温和な笑顔な荒井さんは 頑固なまでにアマチュア

演劇に信念をもち、こだわりを貫き通した。だから、アマチュア演劇の原点とも言える、高校演劇をこよなく愛していた。県内はもとより毎年高校演劇の全国大会に現地まで足を運び、人知れず応援し続けていた。昨年、佐賀での高校演劇において、神奈川県の代表校の逗子開成高校が全国最優秀賞を得たのも はなむけになったろうか。そのTV中継の中受付を通過する荒井さんの姿が映っていた。荒井さんを見たのはそれが最後だったのかも知れない。

荒井さんには二つの残念があったに違いない。一つは元日に届いた年賀状にも書き記していた資料室の将来の展望。もう一つは ライフワークの演劇総合目録が完成間近で、無念の実現を見れなかったこと。二つとも 我々に残された 荒井さんからの宿題と受け止め、必ずや、その想いを我々受け止めなくてはいけない。

荒井さんは シャイで表舞台に出ることを非常に嫌がっていたので、横浜演劇研究所の代表も横浜小劇場の代表も名乗らなかったが、前理事長であった飯田克衛さん亡き後、全てを背負っていたのは荒井さんだと誰もが思っていたのに違いない。さらに、研究所の室長（我々はそう思っている）は この資料室が神奈川の演劇の砦とするなら、さらにその存在は大きい。演劇研究者、荒井さんの功績は、さらに大きい。

戯曲に囲まれた生活は楽しかったのに違いない。

そして、最後に大好きな仏像三昧。きっと幸せな人生であったと信じ、見事な演劇人生に 大いなる拍手を贈りたい。

合掌。

### 神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』● ガムシャリズム ● 京浜協同劇団 ● 劇団蒼い群 ● 劇団おらんだ ● 劇団河童座
- 劇団かに座 ● 劇団唐ゼミ ☆ ● 劇団こゆるぎ座 ● 劇団砂からマカロン ● 劇団820製作所 ● 劇団「無題」
- 劇団横濱にゆうくりあ ● theater 045 syndicate ● G/9-Project ● studio salt ● TEAM IMITATION ● 虹の素
- プラスティックな月 ● マシュマロ・ウェーブ ● まりこ ☆ みゅーじあむ ● M.PinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
- ムームー企画 ● 横浜小劇場(横浜演劇研究所付属)

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>